

## 土屋又三郎『農業図絵』の「絵引」化

本書は土屋又三郎『農業図絵』に紹介されている金沢城下とその近辺、御供田村の図絵を対象に、『日本近世生活絵引』の作成がどのように可能か、失敗・間違いを恐れずに、その試案の一端を披瀝・紹介した試案本のひとつである。

日本常民文化研究所では過去に『絵巻物による日本常民生活絵引』（『絵引』と略）を編纂・発行した。しかし、その対象は中世までにとどまっていた。神奈川大学21世紀COEプログラムではその近世編の作成を試みた。本書はその成果、試案本のひとつである。

『絵引』作成の研究や作業過程では多くの難点の存在も明らかになった。差別用語の問題もあるが、近世や近代にも一般的に使われてきた言葉や名称が今の時代に適当ではないものもあった。また、過去、民衆史研究が盛んであった時代があるが、その当時、当然、民衆生活の細部、たとえば当時、どんな食べ物をどんな容器を使い食べていたのか、着ている着物はどんな着物で、その材質は何か、地域ではそれは何と呼ばれ、どのようにして編んだのか、使っていた道具は、あるいは購入したとしたらだれからどのようにしてなど、様々な事柄が不十分でもそれなりの先行研究があるものと考えていた。だが、実際にはそうした先行研究がほとんどないことに戸惑いを覚えた。かかる事柄はもっぱら民俗学が対象としてきた分野であるが、それでも整った総合的な調査・研究が少ない。こうした民衆の基礎的な事柄の把握抜きの研究が、民衆史研究の名のもとにおこなわれていたことに今更ながら驚くと同時に、これからの研究にはこうした研究も必要と自戒を込めて痛

感させられている。

かかる状況の中で、紆余曲折を経ながら絵引研究・作成作業を進めてきた。試行錯誤ながら試作本製作の段階にあるが、それを提示し、多くの方々のご批判を仰ぎ、いずれ完成本の『日本近世生活絵引』作成を世に問いたいと考えている。

本書では享保2年（1717）の『農業図絵』を『絵引』作成の対象に選んだ。理由は、『農業図絵』が従来、『加賀農耕風俗図絵』とも呼ばれてきたように、元禄・享保期（1688～1735年）の加賀の農業を描いた農書であり、かつそれは農業にとどまらず、金沢城下から御供田村までの沿道にそったいろいろな風物・情景・人びとの生活が描かれていることにある。

『農業図絵』研究の第一人者、清水隆久氏の研究によると、又三郎は寛文4年（1664）、20歳の時に父の跡を継いで、他藩の大庄屋にあたる石川郡御供田村の無組御扶持人十村役を担った。十村役とは藩命によって扶持百姓が十ヶ村以上の村を取り仕切る肝煎で、又三郎がその役に任命され、徴税や民政、生産指導に当たったといわれている。又三郎は正保4年（1644）生まれの土屋家3代目である。理由は定かでないが、その又三郎が平百姓に格下げされた。元禄6年（1693）、父佐十郎が改作奉行園田佐十郎の罪に連座し、流刑になったことによる。その後、『農業図絵』を執筆し、享保2年（1717）に完成させ、2年後に75歳で死去した（土屋又三郎『農業図絵』日本農書全集第26巻 社団法人農山漁村文化協会刊 1983年 清水隆久氏の「解題」と「解題補記」pp276～330 以下、「清水解題」と略）。

実はこの『農業図絵』の類本、『耕稼春秋』八、九、十が神奈川大学日本常民文化研究所に所蔵されている（『常民研本』）。類本は他にもある。肥料商岩瀬弥助の寄贈による『耕稼春秋』 壺、弐（『岩瀬本』）で、愛知県西尾市立図書館に架蔵されている。長年、『耕稼春秋』を比較検討されてきた堀尾尚志氏（『耕稼春秋』日本農書全集第4巻 社団法人農山漁村文化協会刊 1980年 解題〈2〉）や、『農業図絵』の考証をかさねて来られた清水隆久氏の研究（「清水解題」）によると、細部に至るまで本文の字体も『岩瀬本』と『常民研本』は酷似し、同一人物による筆写の可能性が大とまでいわれている。とはいえ、『常民研本』は図絵に省略が多い。彩色も単調である。資料としては情報量が少なく、『絵引』作成には適さない。そこで、図絵を精緻に描いた『桜井本』（石川県鶴来町桜井慶二郎氏蔵）を底本とした『日本農書全集』第26巻所収の『農業図絵』を『絵引』化をすることにした。しかも、『農業図絵』の翻刻・刊行後、20年余の歳月を経て、欠落していた著者の「農業図之目録」の残余を清水氏が石川県河北郡の旧十村役家で発見し、その考証も精緻であり、『絵引』作成の対象としてこれに優る物はない、との判断もある（前掲『農業図絵』第6刷に発見の「農業目録」を掲載）。さらに、本学常民文化研究所がその研究所の招致以前の1949年から、水産庁の委託を受けた漁業制度改革資料調査を行い、奥能登調査に関わりをもち続けてきた歴史的経緯があることも一因となった。

土屋又三郎は『農業図絵』の出版前に、『金城隆盛私記』（元禄15年）、『耕作私記』（宝永4年）、『加越能大路水経』（正徳4年。『加越能山川記』全1巻、ないしは『加越能大路水源記』とも）を著している（「清水解題」）。そうしたなかで、すでに宝永4年（1707）には、「方言俗言を以ってし、いささかも雅言」しない説明とその精緻な農耕風俗図でよく知られている著名な農書『耕稼春秋』全7巻を刊行している。この農書では、農具が地元でどのように言われ、年中行事がどのように行われているのかなども

記録されており、参考になる（堀尾尚志「解題（2）」前掲『耕稼春秋』）。『農業図絵』はこの『耕稼春秋』の後に著された。『農業図絵』も加賀の農事暦にもとづく金沢近郊村の農耕風俗を描いた農書であるが、単なる農書ではなく、17世紀末から18世紀はじめにかけての金沢城下町域の庶民生活も描かれ、かつ用具、情景が当時の言葉・用語で簡略に説明されている。つまり、『耕稼春秋』巻之一の「耕稼年中行事」の絵図化を試みた作品であるともいえる。ただ、著者の主題が農業と農村にあるだけに、城下町の描写は寂しく、簡略化されている憾みがある。また、図絵には18世紀中ごろわが国に伝えられたという遠近法による描写法がまだ取り入れられていない。

ところで『近世生活絵引』は、できるだけ図絵が作成された時代の言葉や用語で記録・説明されることにこしたことはない。当然、そのためには文献の博搜は欠かせない。困難を伴うが、その描かれた用具・道具・衣服などの名称が果たしてその時代のものか、その検討をする必要もある。とくに図絵が職業的な絵師や画工などによって描かれた場合にはその写実性も注意されなければならない。その点、『農業図絵』の作者、土屋又三郎は十村役として百姓を指導し、自らも耕作に携わり、実験と実見した経験者である。時代の証言者でもある。さらに、先にも指摘したように『農業図絵』の内容に関する清水氏の詳細な考証がある。その内容に関わる堀尾氏の『耕稼春秋』に関する解説も手助けとなる。『絵引』試作本作成には力強い援護である。

なお、『絵引』作成には、清水隆久氏の『農業図絵』の翻刻と「清水解題」を底本とし、堀尾尚志氏の『耕稼春秋』の翻刻・解題を参考にした。『農業図絵』からの切取りは報告者の任意、主観によったことを付記して置きたい。併せて、『農業図絵』のなかに描かれた女性については、北陸農村における女性の立場・役割を幕藩制社会のジェンダーの視点から分析した長島淳子氏の『幕藩制社会のジェンダー構造』（校倉書房 2006年）を参考にした。

（田島）